古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 70 号（2008 年 9 月）

二つの『老乞大集覧』（下）

竹越　孝

3. 内容の異同

次に、乙亥字本と朴通事本の注釈部分に見られる異同を一覧の形で示す。カッコ内の出現箇所は巻・葉・表裏・行・左右・字数の順に記す。影印不鮮明の箇所は含めず、また字体に関する異同は取り上げない。

No.	項目	乙亥字本	朴通事本	備考
(1)	高唐	二 （上 1a8 右 15）	一 （上 1a7 左 16）	
(2)	弓兵	司 （上 1b9 右 5）	事 （上 1b6 右 11）	
(3)	轆轤	太？ （上 2a2 右 9）	木 （上 1b9 右 9）	乙亥字本はハングル cA の可能性あり
(4)	轆轤	太？ （上 2a2 左 9）	木 （上 1b9 左 7）	同上
(5)	行李	［山/人/子］ （上 2a10 右 2）	岑 （上 2a5 左 1）	
(6)	爐裏	即 （上 3a2 右 8）	爐 （上 2b5 右 8）	
(7)	爐裏	黒 （上 3a2 右 18）	生 （上 2b5 右 18）	
(8)	緜羊	所呼羊即 （下 1b6 左 1-4）	呼羊 （下 1b4 右 3-4）	
(9)	緜羊	漢呼胡羊 （下 1b6 左 5-8）	漢呼大羊胡羊 （下 1b4 右 5-10）	
(10)	幫閑的	□ （下 3b6 右 1）	之 （下 3a6 右 8）	乙亥字本闕？

上表に見られるように、二つの『老乞大集覧』における異同は『單字解』の場合に比べてごく少ない。以下、それぞれについて前後の関係箇所を引用してみよう。【乙】は乙亥字本、【朴】は朴通事本を表し、異同箇所には下線を施す。

(1)　　【乙】高唐：在東昌府城東北一百<u>二</u>十里。…（上 1a8）

【朴】高唐：在東昌府城東北一百一十里。…（上 1a7）

（2）　【乙】弓兵：諸司職掌云，…。（上 1b9）

【朴】弓兵：諸事職掌云，…。（上 1b6）

（3-4）　【乙】轆轤：…其制於井上植兩長柱，並穿其頭爲孔。用短太横納於兩長柱之孔，以長繩懸一箍桶於横太腹上之釘。…（上 2a1-2）

【朴】轆轤：…其制於井上植兩長柱，並穿其頭為孔。用短木横納於兩長柱之孔，以長繩懸一箍桶於横木腹上之釘。…（上 1b8-9）

（5）　【乙】行李：…按：舊文使字作[山/人/子]，傳寫誤作李，通作理。（上 2a9-10）

【朴】行李：…按：舊文使字作岑，傳寫誤作李，通作理。（上 2a5）

（6-7）　【乙】爐裏：即鏊也。烙熟燒餅之器，以黒鉄爲之。…（上 3a2）

【朴】爐裏：爐鏊也。烙熟燒餅之器，以生鉄爲之。…（上 2b5）

（8-9）　【乙】緜羊：…本國所呼羊，即漢呼胡羊也。…（下 1b6）

【朴】綿羊：…本國呼羊，漢呼大羊、胡羊也。…（下 1b4）

（10）　【乙】幫閑的：…一説裝扮雜劇□人。（下 3b5-6）

【朴】幫閑的：…一説裝扮雜劇之人。（下 3a6）

上の諸例についてコメントを付していくと以下の通り。（1）は東昌府からの里数が相違しているが、今のところ乙亥字本と朴通事本のいずれが正しいのか判定するすべがない。（2）の書名としては乙亥字本の『諸司職掌』が正しく、同じ書が引かれるもう一つの箇所ではどちらも「司」を用いている（「緜羊」の項、乙亥字本下 1b7、朴通事本下 1b4）。「司」と「事」が朝鮮漢字音で同音となるところから生じた誤りであろう。（3）、（4）の乙亥字本における表記は、漢字の「太」というよりはむしろハングルの cA のように見えるが、いずれにしても意味は通じないので、朴通事本の「短木」、「横木」が正しい。（5）は「使」の異体字に関するものであるが、誤って「李」に作るという後文の内容から見て、乙亥字本の字形の方が正しいと思われる。（6）では「鏊也」という解釈が、乙亥字本では「爐裏」全体に、朴通事本では「爐」のみにかかることになる。（7）の乙亥字本「黒鉄」は不明だが、朴通事本「生鉄」はいわゆる銑鉄（鋳鉄）のこと。（8-9）では朝鮮半島の「羊」に対応する中国での呼び方として、朴通事本では「胡羊」とともに「大羊」もあることになる。（10）は乙亥字本の欠落と思われる箇所だが、影印の不具合である可能性も否定できない。

以上の例を、これまでと同様乙亥字本に基づいて朴通事本が作られたという立場から整理すると、次のようになるであろう（不明な点は除く）：

乙亥字本の記述を朴通事本が誤った例…（2）、（5）

乙亥字本の誤りを朴通事本が正した例…（3）、（4）

乙亥字本の記述を朴通事本が意をもって改めた例…（6）、（7）、（8-9）

4. 声点の省略

さて、『單字解』の場合と同様、乙亥字本ではハングルの部分に声点が付されているが、朴通事本にはその表記がない。こうした声点の省略がいつ行なわれたかと言えば、それは朴通事本の編纂の段階であろうと思われる。

周知のように、『老朴集覽』を構成する三篇のうち、『朴通事集覽』のみは附録としてではなく『朴通事諺解』の中に注の形で組み込まれているが、中村（1961）によると、『朴通事諺解』巻上の「或是博錢拿錢」の「拿錢」に対する注において、jui に二点、gi に一点の傍点が見られるという（17b9 右 7-8）。これは、本来省くべき声点が残ってしまった結果と解釈するのが自然であり、ここから、『朴通事諺解』の編者は声点付きの『老朴集覽』を見ており、その編纂の段階で声点を省くという方針が取られたと考えられる。

なお、中村（1967）は、李丙疇（1966）における乙亥字本の影印について、声点に関しては消極的な価値しか持たないと述べ、「原本影印のとき、原文の加点や汚れを消すために、誤って声点まで犠牲にされたような箇所が散見する。惜しいことである。利用者は、したがって、声点のない箇所をはじめから無声点の形と速断してはならない。」としている。

5. おわりに

以上述べてきた二つの『老乞大集覽』における異同は、全体的に見て『單字解』の場合に比べずっと少ないと言えるだろう。ここから、ではなぜ少ないのか、逆に言えばなぜ『單字解』の場合は多いのか、という問題が提起されるが、それは『單字解』が『老乞大集覽』の場合よりも朴通事本に至る過程が一段階多かった、具体的には 9 行本から 10 行本へという改編を蒙ったためだと推定されること、前稿に述べた通りである。

＜参考文献＞

竹越孝（2008）「二つの『單字解』（上下）」『KOTONOHA』64：3-9；65：5-10.
中村完（1961）「影印『朴通事上』付金思燁解題」『朝鮮学報』18：121-132.
中村完（1967）「李丙疇編校『老朴集覽考』」『朝鮮学報』45：118-124.
李丙疇（1966）『老朴集覽考』서울：進修堂.